

「青年期における自我同一性と親の養育態度の関係について」

徳山 健二

(橋本尚子ゼミ)

はじめに

Erikson(1959/1973)は青年期を「自我同一性対同一性拡散」の危機の時期とした。われわれは青年期に至るまでに親を中心にさまざまな人に同一化して、多様な特性を取り入れ「自分は～である」といえるような自分のものの見方や行動様式を身につけている。青年期になるとそれまで意識されずに取り入れてきた自分に意識を向けるようになる。自分を意識し見つけたとき青年は、多様な特性のどれが本当の自分なのかかわからず、「本当の自分は何か」という疑問をもつ。今まで自分だと思っていた自分が実は自分で作り上げたのではなく、親から言われるままに生きてきた自分にすぎないこと、「これこそ自分だ」といえるようなものがないことに気づくのである。Eriksonは、青年期とは、自分がない、本当の自分かわからないという同一性の危機と直面しながら、本当の自分を模索し見つけていく過程であり、そのために社会が与えた猶予期間であるとした。

そこで、発達において大きく影響してきたであろう、親の存在や養育態度が青年期において、どのような影響を自我同一性の形成に及ぼしているのかと考え、今回の研究を行う。

問題

1. アイデンティティ（自我同一性）

青年期は、児童期までに育てられてきたパーソナリティを、自分自身によって再構築し、自分で更なる発達へと展開していく時期である。西平(1983)は、青年期のパーソナリティを児童期までのものと比較し、「児童期の、相対的に安定し、外向化し、行動的社会的な時期から、その内的均衡が崩れ、内向化し、不安となり、自我に目覚め、独立を要求する、相対的不安定の時期に入る」と述べている。これはアイデンティティ（自我同一

性）の確立のための時期であり、このアイデンティティという概念は、精神分析家のEriksonによって提唱されたものである。主体性、自己定義、存在証明、自覚、自己評価などの意味を内包している。Eriksonはアイデンティティを「自分を自分たらしめている自我の性質であり、他者の中で自己が独自の存在であることを認めると同時に、自己の生育史から一貫した自分らしさの感覚を維持できている状態である。アイデンティティはつねに拡散状態と混乱と力動的な対を成している」と定義している。アイデンティティが確立されたということは、自分がどのような社会的現実には置かれているかを理解したうえで、自分はどのような人間で、どのような価値観、世界観をもち、自分が何者になろうとしているかについて明確なイメージをもち、自分が間違いなくその目標に向かって発達しつつあり、自分の存在が独自のものであり持続的であることに確信をもち、自尊心に裏づけられながら行動できることである。アイデンティティを確立するためには、自己の能力、社会的状況、将来の展望等を見きわめなければならない。当然不安や葛藤があり、決定困難な状態にあると言える。このような決定困難な状態をEriksonは「危機」と呼んでいるが、この意味での危機的状況を乗り越えて社会に適応し、自分のなすべきことが明確になったとき、私たちはアイデンティティを獲得したといえる。しかし、「危機」を乗り越えていくことは容易ではなく、これは、時代によっても違うことが予想される。危機も体験せず早期に自己を確立する者から、教育期間の長期化、価値観の多様化、社会の複雑化、経済的時代的変化などの要因で、アイデンティティを確立するのに時間がかかり、心理的な猶予期間（モラトリアム）が必要な者もいる。確立する時期が遅れたり、もがき苦しみ確立に失敗して自己確立を拒否することもある。このことをアイデン

ティティが拡散していると言い、それに陥った者は無気力、無関心、怠惰な生活を送ったり、精神症状を呈する場合がある。年々増えており今日社会問題ともなっているフリーター、ニート、パラサイトシングル、引きこもりなどはアイデンティティ・ステータスと深く関連していると思われる。

2. モラトリアムの変容

青年期とは、もともとはアイデンティティの確立に専念できるように、成人としての義務や責任の履行が猶予されている時期（モラトリアム）であった(Erikson,1959)。そこでは義務や責任が免除される代わりに、成人としての諸権利も与えられないゆえに、青年たちは1日も早く成人特性を身につけることを渴望し、深刻な自己研究と自立への模索が行われていた。しかし、こうした心理は青年たちが信奉するに足る確固とした大人の社会や価値が存在することを前提としたものでもあった。価値観が多様化し、変動の多い今日の社会は、青年たちの到達目標が漠然としていることもあり、モラトリアムそのものを変質させている。さらに科学技術の発展とそれに伴った社会生活の変化は、そうした技術の習得や応用において青年たちの役割を増大させ、若者文化を出現させている。青年たちの創造性や感性を大切にしないと現代の消費文化は成立しないともいわれており、かつての青年たちのような半人前意識や劣等感は今青年にはなく、むしろ全能感にあふれ、「社会の大切なお客様」とされている傾向もある。Eriksonが指摘したモラトリアムは大人への過渡期としての位置や制約をもち、そのなかで自らの生き方や価値観を模索し、就職や結婚を決めつつ社会の一員になることをめざしたが（こうしたモラトリアムを小此木(1978)は古典的モラトリアムと呼んでいる）、近年は青年たちの立場や価値が社会から受け入れられ、モラトリアムに過渡期としてのニュアンスは消えて、むしろモラトリアムであることそれ自体が目的化するまでに至っていると考えられている。近年のこうした状況は、青年たちにとって居心地のよいものだとする見方ができる反面、さまざまな問題も生じさせている。一つにはモラトリアムに安住し、アイデンティティの追及をおろそかにする現象が指摘されてい

る。社会の一定のメンバーとして、責任ある立場につくことを回避したいとの意識から、就職をさけるために大学や大学院へと進学する青年の増加が指摘されている。しかも、こうした心理的傾向は、青年たちだけでなく、結婚して親になったり、実際に企業組織の一員になってもなお、それぞれの立場に応じた責任や役割を受容することに躊躇する人々が増加し、一つの社会的な性格をなしているという（小此木、1978）。最近ではさらに一歩進んで、青年たちに幼児化の兆候が顕著だという指摘もある。福島(1982)は、現代の青年たちの心理的特徴として「イメージ的思考」「無意識的」「受動的」「母性原理（甘え・依存・ゆるし）」「快樂原理（フィーリング・かっこよさ・自己中心性・幻想性）」等をあげ、そこに、幼児化の傾向を指摘している。アメリカでも、大人になりきれない男性たちの増加が注目されている。「無責任」「不安」「孤独感」「性役割の葛藤」などの特徴をもつ男性をさして「ピーター・パン・シンドローム」と呼ばれている(Kiley,1983)。

モラトリアムに安住したり、いつまでも幼児的な特徴をひきずった青年たちも、あるいは特異な集団的な規律に自己を委ねてしまう青年たちもそれぞれ表現形態は異なるが、現代社会において大人になる難しさを示している点で共通である。流動的で、しかも目指すべき目標を喪失した社会の中で、しかし青年たちは現実的には大人への道进行を避けることはできない。昨今のこうした青年たちの現象は、現代社会でのアイデンティティの確立とそのもの対策の必要性について再認識しなければならないという問題提起をしたものと考えられる。そのためには、青年たちを困む現代の社会的状況に存在している問題点への点検が必要である。

3. 青年期と児童期

青年期は子どもから大人への過渡期であり、青年の社会的地位は児童期とは違ったものになる。身体的成熟を始めとするさまざまな発達、まわりの他者の青年に対する認識を変える。青年期は「第二の誕生」といわれるように、心の構造が急激に変わる時期である。それまで認識されることのなかった自分自身に目が向けられ、自分は一

「青年期における自我同一性と親の養育態度の関係について」

の独自の世界をもつ固有な存在であるという自覚をもつようになる。「個」の自覚は一方で孤独感を、一方で自分自身の内面への関心や固有の自己を求める気持ちをもたらし、青年は自己像を探求し、自分に向けられる他者の目を気にしたり、劣等感に悩まされたりする。また自立の欲求をもち、すべてを自分が主体になってやろうという気持ちを強く持つ。認知能力は形式的操作の段階に達し、抽象的、批判的思考が可能になる。知的世界は広がり、現実とは異なった理想や未来を考えることが可能になる。

われわれは、環境の中に埋め込まれており、変化しつつある環境と相互作用しながら、その環境と自分を協応させようとしている。「変化しつつある人」と「変化しつつある環境」が力動的に協応する過程が適応の過程であり、それを時間的経過とともにとらえたものが人格発達の過程と考えられる。青年期は著しい移行の時期であり、人も環境も変化が大きいので、協応するために多くのエネルギーを必要とする。そのために青年期は一般に「疾風怒濤」の時期とされ、また「危機的」な時期だとされてきた。

児童期までのパーソナリティは、親や先生といういわゆる大人が自分をどのようにみているかが子どもにとって重要となり、大人の言葉を素直に自分の中に取り込む。つまり、大人の見ている自分が、子どもにとっては「自分」というものであり、自分の特性やパーソナリティとして受け入れる。このように児童期においては、子どもの価値観や物の見方は、他律的であり、子どものまわりの大人の影響を強く受け、単に大人からの受けうりのものに過ぎない。しかし、このために児童期は安定したものとなっていた。すなわち、大人は子どもの振舞いを安心して見ていられ、子どもに対して受容的な態度を取るわけであり、それ故子どもは安定した生活が送れることになる。ところが青年期になると、人に与えられていたにすぎなかった自分のパーソナリティ特性、価値観、物の見方を、今度は自分自身の目でしっかりと見直し、自分の頭で主体的に捉えよう考えようとするようになる。これが青年期におけるパーソナリティ再構築であり、青年のパーソナリティはそれゆえ、児童期までのものとはまったく違った意味

を持つ。

4. 青年が生きる世界

青年期は大人との関係が大きく変わる時期でもある。身体的、知的に著しい発達をとげた青年は、それまで保護を受け、全面的に信頼し依存してきた大人と、身体的にも知的にも同等かあるいはそれ以上のレベルになる。このことは青年に「もう子どもではない、大人と対等なのだ」という意識を与え、それまでの大人優位の関係が崩れる。また、社会的発達による生活空間の拡大や認知能力の発達によって、親一家族を客観的に見、相対化できるようになり、親一大人に対する全面的な信頼が崩れて、彼らを批判的に見るようになる。また性的成熟による内的衝動のたかまりは、大人から独立した自分、大人の支配下を脱した（秘密をもった）自分を感じさせ、親から離れたい欲求、自分の世界を自分で作りたい欲求を強めるだろう。このような状況におかれた青年は、それまでの最大の依存対象であった親から離れ（心理的離乳）新たな関係を求める。受動的な与えられた関係ではなく、自ら能動的に形成する、対等で主体的な対人関係を求め、友人、異性の友へと依存の対象を変えていく。この過程はユング心理学によれば「母親殺し」の過程である。青年は子どもを離すまいと自我の自立を阻む「母なるもの（Great mother）」と戦い、象徴的な母親殺しをすることによって個を確立し、そして異性と新たな関係を結ぶとされる。親との関係は新たなものに再体制化され、依存する子どもの立場から批判し反抗するのではなく、対等な一人の人間として理解し肯定できるようになっていく。つまり青年は、それまでの受動的、服従的な関係を断ち切り、自立した個人として親密な関係を新たに作りあげ、その一方で受動的、服従的だった親一大人との関係を一個の人間同士の関係に再体制化して、新たなきずなを作り変えるのだといえる。

5. 親の養育態度

通常、人間は生まれて最初に出会うのが親であり、その後、独立するまで親に養育される。基本的人格の形成にあたって、親の養育態度が重要な要因となるのは間違いないだろう。通説的に授乳

の与え方や、排泄のしつけ方など具体的な養育技術と人格の発達の間をいわれることがあり、またいろいろな研究もなされているが、統一的な見解は出ていない。このような、個別の技術論に必要以上に神経質になり拘泥することはさほど意味のあることではない。より重要なのは、親の性格や、それから派生する全体的な養育態度である。これについては多くの研究がなされているが、Symonds,P.M.(1939)は、親の態度の基本的方向を、拒否—保護、支配—服従の2つとし、これによって、かまいすぎ型、甘やかし型、無視型、残忍型の4類型があるとしている。宮城(1960)はSymonds,P.M.のこの見解を、その他の研究者の結果も合わせ、図1のように表している。それぞれの方向における親の極端な養育態度によって形成される子どもの性格特性が示されている。

親の養育態度と自我同一性との関連についての先行研究の一つに Pable, M.W. (1965)の研究がある。Pable,M.W.は、青年男子で、親の養育態度と自我同一性の関係を質問紙によって研究している。そして両親の愛情が強いほど自我同一性は高いことを見出している。また、父親の統制力の強さを高、中、低、と3群に分けた場合に、中程度の統制力の父親をもつ青年が最も自我同一性が高

いと報告している。さらに彼は男子の自我同一性達成では、父親の役割を重視しており、母親は間接的な役割しかもたないと考えている。また、Kendis, R.J. & Tan, A.L.(1978)は、青年女子で親に対する認知と自我同一性の関係を調べている。彼らによると、自我同一性の高い者は母親を否定的にとらえており、むしろ父親を肯定的にとらえていると報告している。これは、Pableの場合と同様に、女子の場合にも同一性形成において父親の役割が重視されることを示していて興味深い。しかし、Kendisらの研究より以前に行われた Dignan, M.H.(1965)の研究では女子大学生の母親同一化と自我同一性の間に正の相関を見出しており、Kendisらの研究結果と矛盾している。この矛盾に対して、Kendisらは以下のような説明を付け加えている。つまり Dignanが行った1964年当時とは違い、最近では母親はもはや女子大学生にとってモデルとはならない。そして、女性役割を獲得していくには、母親から離脱しなければならないと考えている。この主張を女性の立場の時代的変化という観点から解釈すると以下になる。近年女性が社会に進出し、女性も積極性や自律性を身につける必要に迫られている。従って、従来のような従属的な特徴をもつ母親は

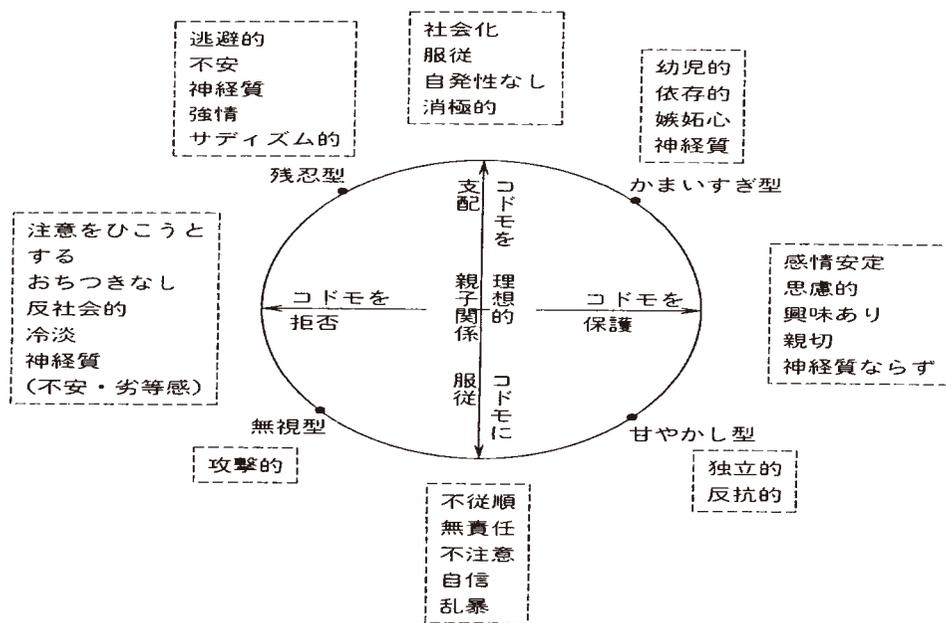


図1 親の養育態度とそれによって形成される子どもの性格特性 (宮城音弥, 1960)

同一化の対象とはならないということかもしれない。

近年の親の養育態度と自我同一性の研究については、田中(2003)が行った、青年期男子における親の養育態度と自我同一性の関係の研究がある。両親の養育態度が自律的な男子は統制的なもとにある者よりも自我同一性が高く、受容的な男子は拒否的なもとにある者よりも自我同一性が高いこと、中でも受容的な養育態度との関係が強いこと、母の養育態度と自我同一性の関係についてもほぼ同様の結果で、母との関係では統制的か否かと自我同一性の関係が受容的な態度との関係よりも強いこと、他方父との間にはほとんど関係がないこと、親の養育態度の一致については、両親がともに受容的か自律的かで一致している場合に自我同一性が高く、拒否的か統制的で一致している場合が低いこと、不一致でも父が統制的で母が自律的な場合には高いことがわかっている。

目的と仮説

本研究では、Eriksonが「自我同一性確立対拡散」の危機の時期であるとした青年期後期にあたる大学生を対象とし、谷(1997a;1997b;1998;2001)によって作成され、信頼性・妥当性が検討、確認されている「多次元自我同一性尺度」と、こちらも信頼性・妥当性が検討されている、櫻井(2003)によって作成された「親からの自律性援助測定尺度」を用いて、自我同一性の形成と親の養育態度及び自律性援助の間にはどのような関係があるかを検討することを目的とする。また、男女別に尺度得点の平均値と標準偏差、相関係数を求め、重回帰分析を行う。仮説1として、多次元自我同一性尺度は、「自我同一性・斉一性」「対自的同一性」「対他的同一性」「心理社会的同一性」の4つから成り立っていることから、母親からの自律性援助と対自的同一性に相関があると考え。これは一般的な家庭においては、母親との関わりが多いと推測するからである。

また仮説2として、対他的同一性と母親からの自律性支援に相関があると推測する。

仮説3として、男女共に「自我同一性・斉一性」と母親からの自律性援助、父親からの自律性援助に相関があると考え。

方法

調査対象 大学生 118名に調査を実施した。そのうち、回答が無記入のものや欠損しているものは取り除いたため、有効回答数は107名(男性60名、女性47名、平均年齢20.03(SD=1.724)歳)であった。

手続き 大学生を対象に、質問紙を配布して実施した。谷(1997a;1997b;1998;2001)が作成した、多次元自我同一性尺度と、櫻井(2003)が作成した、親からの自律性援助測定尺度を使用し、質問紙を作成し、集団的に実施した。

調査期間 2013年11月下旬～12月上旬に調査、回収した。

質問紙

・多次元自我同一性尺度

谷(1997a;1997b;1998;2001)によって作成された、20項目から構成されている多次元から同一性の感覚を測定する自我同一性尺度である。自己の不変性および時間的連続性の感覚を表す「自己斉一性、連続性(5項目)」、自己についての明確さの感覚を表す「対自的同一性(5項目)」、本当の自分自身と他者から見られているであろう自分自身が一致するという感覚を表す「対他的同一性(5項目)」、自分と社会が適応的な結びつきを持っているという感覚を表す「心理社会的同一性(5項目)」という4つの下位概念から構成されている。回答は「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの7件法で求めた。教示は以下の通りである。「次の1～20までについてそれぞれ現在の自分にあてはまると思われる箇所に○印をつけてください。」

・親からの自律性援助測定尺度

櫻井(2003)によって作成された、大学生が認知した親からの自律性援助の程度を測定するための尺度である。20項目から成り立っている。回答は「全く当てはまらない」から「よく当てはまる」までの6件法で求めた。また項目中の「親」の部分に「母親」「父親」に分け、それぞれ同じ内容で計40項目の内容で構成した。教示は以下の通りである。「以下の質問では、あなたから見た母親(父親)

の養育態度や養育行動についてお尋ねします。高校生のころから、現在までの状況を思い出して答えてください。各問いには1から6までの数字のうちから、あなたの母親（父親）に最も当てはまると思う数字を1つ選び、その数字を○で囲んでください。」

結果

- ①尺度の信頼性を検討するため、Cronbachの α 係数を調べたところ、多次元自我同一性尺度においては、「自己斉一性・連続性」は.823、「対自的同一性」は.846、「対他的同一性」は.826、「心理社会的同一性」は.791、親からの自律性援助測定尺度においては、「母親からの自律性援助」は.862、「父親からの自律性援助」は.863と共に高い信頼性が得られた。

- ②そこで、各尺度に含まれる項目の得点の平均値

を尺度得点とした。各尺度の平均値と標準偏差を表1に示した。そして、男女間で平均値の差をt検定により比較した。その結果、自己斉一性・連続性($t(105)=.337, n.s.$)、対自的同一性($t(105)=1.00, n.s.$)、対他的同一性($t(105)=.098, n.s.$)、心理社会的同一性($t(105)=.549, n.s.$)、父親からの自律性援助($t(105)=.252, n.s.$)、母親からの自律性援助($t(105)=.222, n.s.$)のいずれにおいても有意差は見られなかった。

- ③自我同一性と自律性援助の認知の関連を検討するため、男女別に多次元自我同一性尺度と親からの自律性援助測定尺度間の相関係数を求め表2に示した。女性において対自的同一性と父親からの自律性援助には、有意な正の相関が見られた($r=.291, p<.05$)。また、心理社会的同一性と父親からの自律性援助には、有意な正の相関が見られた($r=.412, p<.01$)。男性においては有

表1 各尺度の平均値と標準偏差

		平均値	標準偏差
女性	自己斉一性・連続性	4.42	1.50
	対自的同一性	4.09	1.36
	対他的同一性	3.68	1.19
	心理社会的同一性	4.14	1.25
	父親からの自律性援助	4.02	0.89
	母親からの自律性援助	4.05	0.88
男性	自己斉一性・連続性	4.33	1.39
	対自的同一性	4.37	1.47
	対他的同一性	3.70	1.24
	心理社会的同一性	4.01	1.21
	父親からの自律性援助	4.06	0.70
	母親からの自律性援助	4.01	0.80

表2 多次元自我同一性尺度と親からの自律性援助測定尺度の相関係数

		平均値	標準偏差
女性	自己斉一性・連続性	4.42	1.50
	対自的同一性	4.09	1.36
	対他的同一性	3.68	1.19
	心理社会的同一性	4.14	1.25
	父親からの自律性援助	4.02	0.89
	母親からの自律性援助	4.05	0.88
男性	自己斉一性・連続性	4.33	1.39
	対自的同一性	4.37	1.47
	対他的同一性	3.70	1.24
	心理社会的同一性	4.01	1.21
	父親からの自律性援助	4.06	0.70
	母親からの自律性援助	4.01	0.80

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

「青年期における自我同一性と親の養育態度の関係について」

意な結果は得られなかった。

- ④男女別に自律性援助の認知が自我同一性の確立に影響しているかどうか検討するために、両親からの自律性援助を独立変数に自我同一性を従属変数として重回帰分析を行った。その結果、女性においては、父親からの自律性援助が心理社会的同一性に正の影響を示した ($\beta = .422, p < .05$)。男性においては、対他的同一性に対して、父親からの自律性援助が正の影響を示し ($\beta = .343, p < .05$)、母親からの自律性援助が負の影響を示した ($\beta = -.287, p < .05$)。

考察

男女別に見た自我同一性と自律性援助の関連について

まず、調査で得たデータより、多次元自我同一性尺度と親からの自律性援助測定尺度の相関関係の分析を行ったが、女性においては、対自的同一性と父親からの自律性援助には、有意な正の相関がみられた ($r = .291, p < .05$)。これは、女性が、自分が何をしてどのように生きていくかと考えた場合に行う行動が、父親から受けた自律性援助の影響を受けると考えることができる。また心理社会的同一性と父親からの自律性援助には有意な正の相関が見られた ($r = .412, p < .01$)。これは、父親からの自律性援助が、女性において、生きる上での指針のようなものになっているのではないかと考えることもできるだろう。しかし、男性においては有意な相関はいずれにおいてもみられなかった。これについては、男性が父親・母親を、どこか一歩引いた目線、冷静な目線で捉えているからではないだろうか。

次に、女性において、対自的同一性と母親からの自律性援助については、相関はみられなかった。母親と娘という一般的に親密であろうと予想される関係においてこのような結果であったのにも関わらず、女性の対自的同一性と父親からの自律性援助には有意な相関が見られた。この結果について、これは、対自的同一性が「自分が望んでいることがはっきりしている。」「自分がどうなりたいのかはっきりしている。」「自分のすべきことがはっきりしている。」などの項目が示しているような、自分の人格の形成における、根幹に潜んでいる、揺るがないような部分においては、女性は

父親からの影響を非常に大きく受けるのだろうと筆者は考える。

また、女性においては、心理社会的同一性においても父親からの自律性援助との間に有意な相関が見られている。これもまた、「現実の社会の中で自分らしい生き方ができると思う。」「現実の社会の中で自分らしい生活を送れる自信がある。」「現実の社会の中で自分の可能性を十分に実現できると思う。」などの項目を含んでおり、親が子をどう育ててきたかではなく、「父親」という確固とした存在が自我同一性形成において非常に重要な地位を占めているのではないかと推測する。

また男性において、いずれも有意な相関が見られなかったのは、今回の結果においてはそうであったが、自我同一性という「自分を作る」行為について、前述したような、女性に対する父親の影響のようなものはないのかもしれない。

男女別に見た重回帰分析の結果

次に、男女別に自律性援助の認知が自我同一性の確立に影響しているかどうか検討するために、両親からの自律性援助を独立変数に自我同一性を従属変数として重回帰分析を行ったが、女性においては、父親からの自律性援助が心理社会的同一性に正の影響を示した。これは相関関係で得た結果と類似しており、結果をより強固なものとしたと考える。さらに、男性においては、対他的同一性に対して、父親からの自律性援助が正の影響を示し ($\beta = .343, p < .05$)、母親からの自律性援助が負の影響を示している ($\beta = -.287, p < .05$)。この対他的同一性とは、「自分のまわりの人々は、本当の私をわかっていないと思う。」「自分は周囲の人々によく理解されていると思う。」「人に見られている自分と本当の自分は一致しないと感じる。」「本当の自分は人には理解されないだろう。」「人前での自分は、本当の自分ではないような気がする。」といったものであった。父親の自律性援助が正の影響を与えるということは、やはり男性にも前述したような女性に与える父親からの自律性援助と同じものが作用しているのではないかと示唆される。また母親からの自律性援助が負の影響を示したのは、父親からの自律性援助と母親からの自律性援助に根本的な質の違いがあるためではないだろうか。例えば、母親は普段から近くにい

すぎて、わからないものがあるのではないだろうか。逆に父親においては普段接する機会が少ないことから、社会へ向かう自立という契機には、逆に自分とは異なる他者を必要とし、父親はそのような側面を持つのかもしれない。以上の考察により、仮説1については、母親からの自律性援助と対自的同一性に相関はみられず、仮説は支持されなかった。また仮説2においても対他的同一性と母親からの自律性援助には相関が見られず、仮説の支持はされなかった。仮説3については、これについても、男女共に「自我同一性・斉一性」と母親からの自律性援助、父親からの自律性援助に相関は見られず、仮説の支持には至らなかった。

まとめと今後の課題

本研究の目的は、自我同一性の形成と親の養育態度及び自律性援助の間にどのような関係があるかを検討することであった。女性において、対自的同一性と心理社会的同一性について、父親からの自律性援助には相関関係があることがわかった。青年期における女性の自我同一性の形成に父親からの影響が大きいと考えることができる。そして、男性においては有意な正の相関の結果はいずれにおいても見られなく、青年期の自我同一性形成に父親や母親の存在がそれほど大きな影響を持たないことがわかった。また女性において父親からの自律性援助が心理社会的同一性に正の相関を示し、男性においては、対他的同一性に対して父親からの自律性援助が正の影響を示し、母親からの自律性援助には負の影響を示していることから、いずれにおいても、母親の影響がマイナスに作用しているという結果になっている。筆者は全体的に母親からの自律性援助が正の相関や正の影響を示すものと予想していたが全く異なる結果となった。今後の課題としては、入学形態や生活形態の違いといった視点も大学生の自己形成やアイデンティティの形成、適応の問題を議論する上で有用な視点であると思われる。そして、これから青年期後期を迎える中学生・高校生への調査もよいのではないかと考える。今回調査をした大学生については、すでに青年期後期を迎えており、Eriksonの理論でいえば青年期の終盤である。ある程度親とも分離しており、一人暮らしなどしている学生も多いであろう。また、中学生や高校

生といった比較的親と接する機会も多い思春期の青年たちに、同じ調査を行えば興味深い結果が得られるのではないだろうか。また、数年後に同じ手法で大学生に実験を行い、今回の結果との差を比べてみるというのも非常に興味深いのではないと思われる。今回は質問紙の集計数も少なく、有効回答数も少なかったことから、今後は、質問紙に自由記述なども加えてより多くの回答を得て、分析を行うことが必要であるといえる。

参考・引用文献

- 田中正 2003 青年期男子における親の養育態度と自我同一性の関係 名古屋文理短期大学紀要 第27号
- 戸田成美 2013 ファン対象が自我同一性の発達に及ぼす影響—ファン対象の imaginary companion 的性質に着目して— 花園大学心理カウンセリングセンター研究紀要 第7号
- 山田剛史 2004 現代大学生における自己形成とアイデンティティ—日常的活動とその文脈の観点から— 教育心理学研究, 52, 402-413
- 坂口哲司 編 1995 生涯発達心理学 ナカニシヤ出版
- 平山諭・鈴木隆男 編著 1994 発達心理学の基礎Ⅱ—機能の発達— ミネルヴァ書房
- 小野寺敦子 著 2009 手に取るように発達心理学がわかる本 かんき出版
- 鎌幹八郎・山本力・宮下一博 共編 1984 アイデンティティ研究の展望Ⅰ ナカニシヤ出版
- 無藤隆・高橋恵子・田島信元 編 1990 発達心理学入門Ⅱ—青年・成人・老人 東京大学出版会
- 堀洋道 監修 山本眞理子 編 2001 心理測定尺度集Ⅰ 人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉サイエンス社
- 堀洋道 監修 吉田富二夫・宮本聡介 編 2011 心理測定尺度集Ⅴ 個人から社会へ〈自己・対人関係・価値観〉サイエンス社
- 中畑美早紀 2010 育児に対する意識について—父親の育児関与から考察する— 京都学園大学人間文化学部学生論文集 9, 30-40
- 福尾詩織 2012 青年期における自尊感情と自己

「青年期における自我同一性と親の養育態度の関係について」

愛傾向・対人恐怖心性の関連について 京都学園大学人間文化学部学生論文集 11, 45-60

掛橋未侑 2012 大学生における自我同一性と分離固体化との関連—自我同一性の拡散の経験と取り組みによる現代青年期の自我同一性課題の検討 京都学園大学人間文化学部論文集 11, 70-79

福本俊・西村純一 編 2012 発達心理学 ナカニシヤ出版